「地域移行」を本気で考える

特定非営利活動法人ハート in ハートなんぐん市場／公益財団法人正光会御荘診療所
長野　敏宏

はじめに

日本の精神科病床、中でもいわゆる社会的入院の課題がクローズアップされてから 30 余年が経過した。厚生労働省から平成 16 年に精神保健医療福祉の改革ビジョンの中で「入院医療中心から地域生活中心へ」という基軸が示された後、長期入院者の退院促進を進める「地域移行」の取り組みが全国で取り組まれてきた。平成 16 年当時 22.6 万人であった一年以上入院者は平成 28 年に 17.9 万人と微減したが、それだけの長期入院者がありながら、地域移行支援事業の利用者は年間わずか 500 名程度で推移してきている。他の取り組みを鑑みても、期待される結果に到底届いていない。人生の大半を精神科病院の中で過ごす精神障害者も多数おられてしまうことを看過せず、「地域移行」を我が事として本気で考え、実践していく必要がある。

私たちはどう取り組んできたか

私たちの住む愛南町は、愛媛県の最南端に位置する現在人口 2 万人ほどの町だ。その町で、昭和 40 年代から続く精神保健福祉住民活動を引き継ぎ、地域のネットワークづくり、地域の持続可能性を高めその中に皆が生きる場を創るための産業を興し、福祉を含む社会資源の起業を加速させ、平成 28 年には 149 床あった精神科病床の閉鎖に至った。

病床閉鎖後も、地域生活の中での保健医療福祉による支援や“はたらく”支援の充実により、愛南町全体でも（他の地域にある）精神科病院への入院処遇は年々減少している。様々な精神障害を持つ方々が、市民として、“はたらく”仲間として地域に受け入れられていることを実感している。

「地域移行」を本気で考える

「地域移行」を生業とする精神保健福祉士をはじめとする専門職へ問いたい。『「地域移行」の結果は出せていますか？』様々な事業が複雑にからみあっていることは重々承知だが、結果を出さなければ、多くの人の人生が精神科病院の中で終わっていく。また、自分自身がその立場になる可能性も十分にある。ソーシャルワークの専門性を活かし、社会の変革を起こさなければならない。

さいごに

愛南町の取り組みは、小さな田舎町の実践ではあるが、日本の現在の法制度、文化のもとでも「地域移行」の結果を出すことが十分可能であることを証明してきている。私たちも更に深化を目指すが、世界から立ち遅れた日本の精神保健医療福祉に係る仲間たちの奮起を期待したい。

【キーワード：精神保健医療福祉、精神科医療、地域移行、ソーシャルワーク、地域包括ケアシステム】